

黄子連さんのお墓を訪ねる

2016年 5月15日（日）

運転手を入れて20人乗りのマイクローバスが用意され、9時半に華蓋山麓に到着。ダンスや太極拳にいそしむ人たちを見ながら坂道を登る。山頂に建つ吉林義士王希天君紀念碑／温處旅日蒙難華工紀念碑を取り囲み、この地に記念館を建てることを誓って黙禱し花を捧げた（右集合写真）。



バスは沢雅県坑源村へ黄子連さんの墓参に向かう。先導するのは蘇忠海さん・蘇秀栄さん・周愛華さんの乗用車で、各車とも定員一杯まで乗り込んでいる。途中、1923年に22名が東京で殺害された石橋文化村には華蓋山麓から1時間弱で着いた。仁木ふみ子さんらが訪ねたところに比べ、いかに猛スピードで突っ走っていることか。車の速さも運動が進むはやさも、先輩の皆さん方の苦難に負うものだと心より思う。

昼食は「三真館」という農家料理の店、「酒真 味真 情最真」「山遠 水遠 心不遠」の看板が両脇にかかっている。ここで劉周晰さんと同席する。劉さんは14日の会議で「準備組」の顧問につき、この日も同行された由、温州市の書家協会会長でもある。



いよいよ坑源村だ。2014年にお招きすることができた黄建豊さん（黄子連の曾孫）は村長へ連絡に行き、黄さんの母・林華茵さんがバスに合流する。なんと竹杖を9本も用意しているではないか、老いた日本人たちが来訪すると心配されたのだろうか。車一台がやっとの幅の坂道を登り「紅豆山生態休暇園」の門の先で下車、うっそうたる竹林へ眼前の径は消えていく。いくつものお墓が点在する竹林を下って上り返すと黄子連さんの真新しいお墓が待っていた（左写真）。献花して黙禱。

林華茵さんは竹杖だけでなく、日本からの参加者のお土産にと地元特産の干し筍もたくさん用意されていたのには一同恐縮した。竹杖を記念に頂いたのは言うまでもない。

次いで仁木さんらが建てた五鳳垵の学校跡を訪ねる。かつて副県長であった劉周晰さんから学校が建設された当時の様子をうかがう。「仁木さんが学校を建設したのが1995年で村民は日本人が建てたことを知っている。その後、中央政府の政策によって子どもたちは山を下りることになり、五つの鎮すべての子どもたちが2005年までに平地の学校へ移った」。



遺族への訪問聞き取りは2軒のお宅を訪ねた。最初は蘇上三さん、蘇上四さんの遺族の蘇許有さん（90歳）と蘇任徳さん（80歳）から約一時間ほどお話を伺った。次に桂川村の林玉英さん（96歳、右写真）から小一時間、父が日本へ行ってからの苦難を伺う。ご自身が生後7か月の時に父は日本へ渡り、自分が3歳の時に母と兄・姉を残して父は東京で亡くなった。纏足の母が田んぼの仕事をし、姉は8歳で童養媳として他家に移った……。耳が遠いため周松権さんが耳元で大きな声で尋ねる、温州方言での証言は朱弘さんとの二重通訳になる。「日本人は為すべきことを為してほしい」と訴えられた。おいとまする際おばあさんに「18人の遺族とともに」の中文冊子を贈った。表紙の写真にただ一人見入る姿は九十年前の小さな女の子のようだった。



日が落ちてから温州市内で33人が食事を共にする。当初の席から入れ替わりながら乾杯歓談。この夜初めて劉周晰さんのご先祖も関東大震災で被害に遭った事実が明かされた。今まで日本人と会ったことは多いが、立場もあり話したことはなかったようだ。

食事後の打ち合わせでは、回収した遺族の登記カードから、14日の大会には受難者の遺族代表が210名出席した。一緒に参加した家族を含めると260人—内訳は—瑞安地区から69名、青田地区が14名、甌海・鹿城地区から177名の参加であると詳細が明らかにされた。工作人員・取材陣などを合わせると実に330人が大会に参加していたことになる。

引き続き受難者名簿を確定する努力を払うとともに、受難者と遺族との身分関係を客観的・厳格・精密・正確に証明する資料収集を進めることを日中双方で確認し合った。

（川見一仁）